

二一 最後の弱點

名譽は其の最も善き意味に於て聲聞と全く相異なる。聲聞とは評判なり。評判を博あるは必ずしも難からず。所謂「不朽の名」は、固より自己廣告術の能く取り得る所にあらず。名譽は、不朽の書を著し、若しくは不朽の事業を成したるものに與へらるゝ勳章なり。故に聲聞は廣告を要すと雖も、名譽に至りては則ち然らず。既に不朽の事業を成さんとす、其の渾身の精力を一の目的に集中せざるべからず、固より自ら廣告するに暇あらざるなり。「桃李言はず、下自ら蹊を爲す。」人格は最も確實なる磁石力なり。献身の事業は最も堅固なる碑銘なり。

渾身
李蹊
磁石

百姓

遺算

然れども名を求むるの心を以て動くは決して動機の完全なるものにあらず。利を求むるも、名を求むるも、求むるあるの心は即ち一なり。求むるあるの心を以てす、假令百姓の爲に死するも、亦固より百世の清議を免れず。且、利を求むれば、利は自ら來るべけれども、不朽の名を求むとも、不朽の名は決して來らず。不朽の名は求むるなき心を以て渾身精力を一の目的に集中したるの結果にして、其の結果の來ると否とは、毫も我の關すべきにあらず。動機は善ならざるべからずと雖も、動機の善は決して其の責任を解除するものにあらず。「英雄は遺算多しといふも、遺算多きは必ずしも英雄の面目にあらず。横井小楠の越前に聘せらるゝや、此行唯欲盡心事。成否在天不在人とい

座右の銘

へり。管に成否の人に在らざるのみならず、假令成るも、其の是非得失は亦時の試験を経ざるべからず。是を以て吾人は「己に在るものを盡くして天命を待つ。」を以て座右の銘と爲さざるべからず。

天命を待つとは何ぞ。名譽てふ結果を求むるにあらず、己の爲す所を以て之を「時」に提出し歴史^{ヒストリ}的裁判^{カタル}を求むるに在り。楊子雲の太玄を草するや、曰く「後世必ず我を知るものあらん」と。所謂千秋の名は即ち歴史^{ヒストリ}的裁判に俟つものにあらずや。歴史^{ヒストリ}的裁判と雖も、必ずしも常に正しきにはあらず、クロムウェルの如き、井伊大老の如き、毀譽今に紛々たるも、歴史^{ヒストリ}的裁判は英雄に對する大審院なり。苟も天道の是非を疑はざるものは、天下の事は區々人工にて成敗するも

毀譽

十頭字街

のにあらざるを信じ、公明正大十字街頭を白日に行くの覺悟を爲せ。斯くてこそ「斯くあれば斯くなるもの」と知りながら己むに己まれぬ大和魂^{ダイワムスナ}とこそ爲るべかりけれ。
*ミルトンは「名を求むるは貴き心の最後の弱點なり」といへり。若し名を求むる心ならば、更に其の心を進めて、善を爲すに集中せよ。是名を求めずして、名自ら來るの道なり。常に爾の心を現實以上、自己以上に置け。常に天地の大道に立脚して、斯居斯民に負かざるを期せよ。
(茅原華山)